

路地とごんばこと岸和田

- ごみばこが多く残るまちとは -

岸和田市教育委員会 山岡邦章

はじめに

岸和田には、今も昭和の町並みが残っている。これらはノスタルジックな雰囲気醸しだすとともに、失われつつある路地の風景を残す、岸和田の貴重な資産だと考えられる。しかし、これらの昭和の町も開発に伴う消滅の波が押し寄せていることは避けられない事実であり、つい先日まであったはずのクラシカルな建物、風景が、ある日突然消滅しているという事態が日常になりつつある。だが今なら、これらの「昭和」の残片を切り取り記録してゆくことは可能である。こういった作業が、この地域の歴史的、文化的な価値を再認識してゆくきっかけとなることを願い、踏査を行うこととした。

基本的な作業は、まず現地の確認である。筆者だけでは、網羅は困難であり、次世代への問題意識の継承といった課題も含めて、本課へ職業体験実習にきた岸和田市春木中学校、久米田中学校、北中学校の生徒とともにいわゆる「旧市」と呼ばれる地域の路地を網羅的に踏査した。



まちかどにたたずむごみ箱

このような状況下、様々な昭和の遺産が残る岸和田の路地で、特にコンクリート製ごみ箱が非常に多く存在することに着眼し、このごみ箱から見える岸和田について考えてみたい。

路地とは

路地について、インターネット上の百科事典ウィキペディア (Wikipedia) には、以下のような記述がある。長くなるが引用する。

「家屋の間に便宜的に設けられた通路である。主に歩行者やそれに順ずる者の交通に供され、自動車の交通はえてして考慮されない。いわゆる「横丁」はおおむね同じようなニュアンスがあるが、「路地」と表現されると更に狭く隣接する建物の関係者以外はほとんど利用しない道を示し、生活道路を含む自動車交通に対応した主要な道路とは別に、勝手口など重要ではないで入り口から家屋に出入りするために利用される。都市の下町や漁村集落に多く分布し、洗濯乾しや地蔵や植木の存在とともに居住者の生活空間として活用され、コミュニティをつなぐ空間を成す。いわゆる「道路」ではないことから、私有地である家屋の敷地とは余り区別されず、私財が留め置かれることもままあり、こと古い町並みでは地域住民の様々な生活の一端を塀や壁・垣根の外に見出せることも珍しくはない」

いささか記述者の経験と思い込みに基づいた状況的記述の傾向があるが、概ね路地についての一般的な認識を表していると考えられる。

しかしこういった、現状を元に、経験と思い込みという個人個人で異なる概念に基づき路地について考察を行うことは、抽出されるべき事象についても個々で異なってゆく危険性があり、論を成すにあたっては、ある程度の普遍化した認識を形成してゆく必要があると考えられる。一概に路地といっても様々なタイプが存在する。狭い道だけが定義ではないのである。ウィキペディア (Wikipedia) の記述のような、現状を元に考察を進めるとあくまでも状況論にとどまり、路地の本質は見えてこない。

そこで本論の主題となるコンクリート製ごみ箱が多く存在すると予測される路地について、一応の共通認識を形成するため、発生過程および目的などから以下のような分類を試みたい。

なお、分類の基本型式は東京都荒川区「荒川ふるさと歴史館」の展示を参考に、農村を持つ岸和田の路地に合致するよう1型式を加え、個々の解説は筆者の記述である。

引き込み型

奥の旧家、社寺、祠、広場などへ路地を引き込み、その道に沿って家が並ぶ形である。農村、漁村などに多い。参道などとはやや性格が異なり、必ずしも正式な参詣道である必要はない。

通り抜け型

ある程度の幅員を持つ道と道が構成する一つの集团的町ブロック内を抜ける、補助的な道である。家屋との接触面は裏面だけとは限らず、側面、表面など複雑に変化する。抜け道的な要素を含むため、ジグザグと見通しが悪い特徴がある。また、城下町では家屋間型とも設定でき、家屋と家屋の間が細い通りとなったもので、表通りと裏通りをつなぐ。

空き地連結型

前面の道に沿って連続する家の裏面や通り庭が連結し、通路化した形を特徴とする。路地の中でも、その町ブロックの生活者のみが使用する。共同空間的な要素が強く、共同井戸などが多く見られる。基本的にまっすぐ伸びるが、道幅が一定しない特徴がある。

袋小路型

単独および複式の家屋のみに使用されるべく設置された道。田舎の農村に多く、どんどん細くなっていき、最後は個人宅の前庭に出る。都市部では、「私道」と書かれている場合もある。

土手・水路敷き利用型

集合的な農村では、村中を通る小さな水路に沿って泥揚げ場が路地に変化している場合も見受けられる。通り抜け型的一种だが、都市部には少ない路地の一型式として挙げておきたい。

もちろん、これらに当てはまらない路地も存在するが、基本的にはこの5つの型のうち

複数を兼ね備える型式であり、大きく用途が異なるものは無いであろう。例えば童謡「とおりゃんせ」にてでくる「天神様の細道」などは、引き込み型と通り抜け型が複合したものであることが想定できる。

また、岸和田は城下町の路地というイメージが強いが、城下町ではむしろ整合的な町並みが形成され、あまり雑然とした路地は形成されず、基本的には通り抜け型が主体となる。むしろ、城下町の規律からはやや外れた地域のほうが各型を組み合わせた特色ある路地が形成されるのである。

これらの路地分類の中で、今回着目したコンクリート製ごみ箱が見つかる可能性が高いのは、引き込み型路地と袋小路型路地であろう。路地としては家屋の表面に道がある場合が多く、コンクリート製ごみ箱の設置目的である「回収」の要件を満たしやすいからである。通り抜け型では回収が難しい場合が多く、空き地連結型ではごみはその空き地に埋められる場合が多いからである。作業はこういった路地の発生過程による特性に合わせて踏査を行うべきであろうと考えられる。

コンクリート製ごみ箱

このごみ箱の正式な名称はわからない。しかし、「コンクリート製ごみ箱」でインターネット検索をかけると、全国各地での目撃情報がヒットするため、この名称で基本的な合意は得られているものと理解している。他には愛称として「路地箱」と呼んでいるごみ箱愛好家もいるようだが、この名称では箱自身の帰属的な属性の一つは見えるものの、前段の路地の考察でも明らかなように、全ての路地に置かれる訳でもなく、また大通りに面して設置されることもあり、「結果的に路地に残っていることが多い」という状況的な名称であるため、ごみ箱自体の本質および特性が正しく表現されていないことから、本稿では一般的な認識に従いたい。

また、岸和田市民の方の話では、これは正しくは「ごんばこ」であって「ごみ箱」ではないという指摘もいただいている。(註1)なるほど、本論は岸和田という限られた地域での事象を書いているものであるから、この場では指摘のとおり、市内のものについては以下「ごんばこ」で表記することにする。

踏査での聴き取りによると、これらのごんばこは、戦後、防火水槽の撤去と共に設置が進められたらしく、基本的には個人購入だったようである。また、これらの製品は官製品でもなく、地域の建材屋のなどで作られ、店舗で販売、配達までされていたようである。

その結果、ごんばこは個人購入という背景があるためか、製品にもランクが存在し、小石吹き付け仕様的高级品から、コンクリート地のもの、大きさにも大、中、小が存在し、形状や開口部の形態差もいくつか存在する。また、製作年代不詳だが同型式の木製も存在し、木製の転用品なども存在する。調査するほどにわかるバリエーションとアンダーグラウンドの深さは、想像以上のものがある。では、次に代表的な事例を示しておきたい。

小型

もっともバリエーション差が見られる。開口部の形態差がいくつか見られる。バリエーション差については同様の小型でも写真のようなタイプも存在し、これについては、型枠で製作するに当たり、開口部の工程に違いがあり、いくつかの工程が増えるため、やや高価なものであったと推測している。

標準型

もっともよく見られるものである。仕様の差もあまり認められず開口部の形態差も2～3例である。

1世帯が要求するごみの量に最も適していたと考えられる。コンクリート地のもの、小石吹きつけのものも見られる。

大型

岸城町職員会館横、上野町西大宮の下がりにある。五軒屋町高見観音のものも含めるべきか。職員会館横にあるため、市役所の業務的なごみに対応したものではないかと考えられる。数は少ないが、業務、事業系のごみを排出する所で残存している。2基セットで置かれる場合もある。

木製標準型

名称はやや考慮の余地が残されているが、木製のもので、自家製のものである。現役のものは確認できているところで、五軒屋町の1基のみであり、過去にごんばことして使用されていた



木製 ごんばこ

と推測されるものが他に1基ある。

木製のもの

は非常に残りにくいため、貴重な存在である。



小型 ごんばこ



小型 ごんばこ バリエーション例



標準型 ごんばこ



大型 ごんばこ

木製転用型

りんご箱などを転用し、最も容易に設置されたものである。しかし、容易であるがために容易に消滅し、現在市内では紀州街道の本町で1件の使用例が認められるのみである。非常に貴重な例である。



木製転用型ごんばこ

現況からはあまり見えてこないが、実態としては木製のものも多かったようで、これも既製品、自作から、りんご箱転用品まで様々なものが存在したようである。むしろ、木製の方が一般的であった可能性もある。言い換えれば、そもそもコンクリート製ごみ箱自体が「ええもん」であり、high society の持ちうる高級品であったと考えられるのである。

その中でも、耐久性の問題からか、コンクリート製ごんばこの生存率は非常に高く、岸和田では今でも多くのものが“現役”で使用されていることが確認できる。

これら、ごんばこの使用法は、上部からの投入後、契約したごみ回収業者が横の出し口から「掻き出し」て、大八車やリヤカーで回収を行ったといわれ、ウィキペディア (Wikipedia) によると、

「現在のように収集車によるごみ収集制度が定められる以前の、昭和初期から 30 年代頃までは、家庭の前にコンクリート製もしくは木製のごみ箱が置いてあった。この箱の上ふたを開けてごみを入れていた。回収する際は、回収者が前面のふたを開けてごみを回収し、大八車などで運んでいた。」

とある。概ね正しい標記と考えられるが、むしろ、初期の『サザエさん』には、カツオに庭に穴を掘らせる逸話が存在する。またサザエさん自身も庭にごみ穴を掘る行為が見られることなどから、戦後すぐまではなま物の処理などは庭に廃棄土坑を掘る行為の方が一般的であったと解釈され、岸和田の市街地では裏庭的空間が存在しないことなどから、恒常的に捨てざるを得ないものを投棄するために設置されたものであったのであろう。また、岸和田でも田園部、特に水路がある地域では特設設置される比率が少ない印象を受ける。これは、推測だが、なま物は水路への投棄が一般的であった時代背景が影響するのではないだろうか。

これらごんばこの設置に関しては岸和田では文献等で確認できるものは見当たらない。市の環境部局などへも照会を行ったが、この時期の資料は全く残っていないようである。

しかし実際には、岸和田ではこのごんばこが非常に多く残っているのである。ネイティブの岸和田人ではない筆者は、他の地域での残存の少なさがわかるのだが、地元の人にとっては「そんなもん、めずらしいない」「どこにでもあるやん」といった反応が見られる。私はこの点に注目したい。この岸和田のどこにでもあるごんばこは、実は、日本国内、いや大阪府下という視点に切り替えると「どこにでもあるわけではない」という事実置き換わ

る。「どこにでもある」岸和田の生存率がものすごいのである。

たとえば古い町並みが残る、京都市、奈良市内では一切見かけることができない。東京の荒川区、台東区、墨田区などという下町風情の残る町でも筆者が踏査を行った限り、生存例は見られなかった。地方都市では会津若松ではバスに乗っていた中で、道ばたで1基見かけたのみであった。



岸和田市中町 ごんばこ密集地域

だが、このごみ箱は、過去には町なかの普遍的なものとしてテレビにも登場する。その昔、「ドリフターズ」のコントで、寮に戻り遅れた志村けんが、このコンクリートごみ箱に乗って塀を乗り越えようとする場面がある。コントでは蓋がつぶれて中に落ちるのだが、こういったごみ箱に嵌まるコントはよくあったのを記憶している。それほど、町の風景に欠かせないものであったのであろう。

しかし、このコンクリート製ごみ箱は、現在、大阪市などの大都市部ではほとんど見られなくなっている。その理由として、大阪では、1970年の大阪万国博覧会開催を契機に街中の美観を損ねるものとして撤去され、ポリペールごみ箱に替わった背景がある(註2)。同じく東京でも東京オリンピックを契機に撤去が進められたという経緯があるようだ。

また、インターネット上では

「コンクリート製のゴミ箱が、昭和30年代の終わり頃に見られなくなったのは、東京オリンピック(1964年10月)を開催するのに、道路にゴミ箱が有るのは見苦しいと、田中角栄が言ったので無くなっていったらしい。丁度その時に、セキスイの青い丸いプラスチックゴミ入れが売り出されたので、一気に無くなった。これが本当かどうかは調べていませんが、面白い説。」とも見られる。

この時、田中角栄は内閣総理大臣ではなく大蔵大臣であり、景観に関して発言する立場にはないと考えられ、真偽のほどは確認できないが、いずれにせよすでにこの時期には存在が美観を損ねる存在、旧世界的な存在とされるほどであったのだろう。

現代的な視点で見ると、むしろ安っぽいポリペールより、コンクリート製の方が景観的にも美しいような印象を持つ。だが、高度経済成長期の時代背景と大阪万国博覧会での「人類の進歩と調和」のかけ声の元、石油化学の発展とともに、poli=多分子構造で素材自体が柔軟性をもつ高分子化合物、ポリプロピレンが生まれ、プラスチックが時代を象徴するようになり、旧世界の遺産と目されたコンクリートごみ箱は、調和とは名ばかりの、淘汰の憂き目に遭ったのである。

しかし、かつて敵対関係にあったごんばこと、ポリペールは40年の歳月をかけて共存の道を歩み、踏査途中で見かけたものでは、ごんばこの中にポリペールが座り、協働で事態にあたることも珍しくないようである。むしろ写真のように破損したごんばこの機能を補いそ

の身で支える姿には、相互扶助の精神すら垣間見える。

さらに、近年変化した収集システムに対応し、ごんばこの中に針金ハンガーを逆さまにセットし、岸和田市清掃局指定の有料ゴミ袋を引っ掛けてぶら下げるといった進化形も確認できた。まさに独自の進化を遂げていると言えよう。

実は、我々日本人が40年前に目指したはずの人類の「進歩と調和」というものは、淘汰をくり抜けた岸和田のごんばこが具現化しているのである。

まとめにかえて - 岸和田にとってごんばこは一

大都市部では絶滅、岸和田では特異とってよいくらい生存するごんばこだが、他の地域、地方都市などではどうだろうか。インターネット上には、検索をかけると広島市の方のレポートがヒットする。どうやら広島市にはいくつか生き残っているようである。また、隣の貝塚市でも多くのごんばこを確認することができる。しかし、岸和田に近い近隣市、堺市や泉佐野市、泉南市などではまったくといってよいくらい見かけない。このような地域差とは何なのであろうか。

可能性として考えられるのは、古くからの人口集中地域であり、塵芥収集システムが早くから整っていたということだが、それでは大阪市内、堺市内での生存数の少なさが説明できない。しかし、残っている町、残っていない町を比較すると、先にも考察したが、大きなイベント的なきっかけ、さらに高度経済成長期の都市再開発、区画整理事業など、街路の状況を一変させるきっかけを受けるか否かの違いが大きく作用していると考えられる。

また、過去にごんばこが設置されていた場所が、写真のようにそのまま現在でもごみの収集場所として指定されている場合が多く、他にも生き残ったごんばこも引き続きごみの収集拠点機能を有していることが大きいと考えられる。加えて、祭礼などに代表される伝統的なもの、古いものを継承し続ける岸和田の住民性も影響しているのではないだろうか。

岸和田にも大きな変革の機会があった。例えば大



ポリペールとごんばこの協働例



ポリペールとごんばこの相互扶助



上、昭和30年代 下、平成22年

阪万国博覧会の影響は岸和田にも及び、駅前通り商店街や城周辺では盛大なパレードが行われている。しかし、大阪市内とは異なり、ごんばこは撤去されなかったのである。

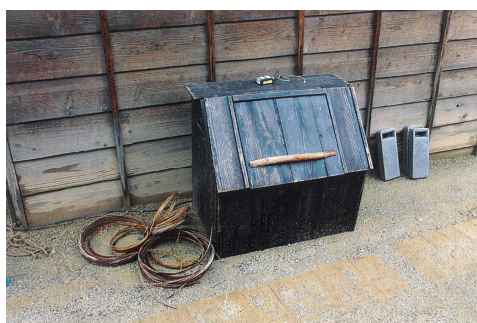
実際に踏査を実施していると、駅前通り商店街、紀州街道などの人目に付く美観を意識した町並みの場所では、ほとんど見る事ができない。しかし、1歩路地へと踏み込めば、まだまだごんばこは健在なのである。面従腹背といえ言い過ぎかも知れないが、岸和田市民のしたたかさを感じ、人が住み、生活感あつての町という、町の健全さを感じる事のできるものではないだろうか。

むしろ、他の地域で、歴史的建造物周辺や美観地区などに指定された場所にごんばこが無いという事実が、健全な町という視点では、いささかやりすぎなのではないだろうかという印象を持つのである。

最近、岸和田では岸和田を舞台としたNHKの連続ドラマ「カーネーション」が、話題にのぼる。その撮影風景の中に、町かどにわざわざ木製のごみ箱がセットの一つとして設置されていたという情報を得た。(註3)やはりNHK的にみても、岸和田の町かどにはごんばこは無くしてはならない舞台装置なのだということがわかり、岸和田の特徴をよく捉えているなという安心感を覚えた。



大阪万博の岸和田駅前パレード



NHKのごんばこ

岸和田の町かどにはごんばこはよく似合う。もはや一つの風景である。つまり、予定調和的結論で言えば、岸和田、貝塚は大阪市内では失われつつある古きよき町がまだまだ残り、そういった古いものを継承する意思がかるうじて残る地域であるといえよう。岸和田でのコンクリート製ごみ箱「ごんばこ」の生存は、その指標となるものである。

近年、文化財保護法の改正に伴い、文化庁が推し進める次世代へと残したい文化財として「文化的景観」の選定事業が行われ「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの(註4)」として、全国の重要文化的景観が選定されている。またこれに関連して『都市の文化と景観 採掘・製造, 流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』が刊行された。これは地域の特徴ある景観自体が文化財として扱われる時代となったことを示す。つまり、これからの岸和田では、ごんばこ自身が、そしてごんばこが数多く残る町自体が、貴重な昭和遺産として大切にしておくべき、地域の文化的景観の一つとして位置づけられるべき文化財なのである。

補記 この基本調査は平成 22 年から実施している。しかし、すでに市内のごんばこの中には、昨年確かにあったものが今年は消滅している例も見られる。一見、馬鹿げた調査かも知れないが、岸和田の変革のスピードを理解する好例でもある。日常に馴染んだ景観も文化財であり、読者の意志で護られる文化財もあるということをご理解賜れば幸いである。

(註 1) 江間一夫氏のご教示。岸和田では「ごみ箱」ではなく「ごんばこ」である。

(註 2) 渡邊隆氏のご教示。大阪歴史博物館ライブラリーの自動選択システム「昭和の映像 日本のニュース」に「大阪市ニュース 盛り上がる万国博覧会準備市民運動」1969 年 8 月があり、万国博覧会に向けて大阪市内清掃活動の中に、コンクリート製ごみ箱撤去を行うくだりがある。

(註 3) 田中知子氏よりご教示。写真についてもご提供いただいた。

(註 4) 文化財保護法第二条第 1 項第五号より引用。文化庁が推し進める次世代へと残したい文化財として、「文化的景観」の選定事業がある。こういったものへの登録を進めるには、岸和田市民の認識、合意形成が必要である。

(文化庁 H P <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html>)

参考文献 まちづくり研究会編『季刊 まちづくり 8 路地と横丁の再生』(2005)

文化庁文化財部記念物課監修『都市の文化と景観』採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会編 (同成社 2010)